

The image features a background of a repeating geometric pattern of interconnected lines forming star-like shapes. A vertical line runs down the center. On the right side, a red flower is shown in a circular frame. The text 'I Shiki Magazine' is centered within this circle. Below the main title, the words 'Take Free' are written in a smaller font. The overall color palette is dark with light geometric lines and a vibrant red flower.

I Shiki Magazine

Take Free

pain+

「pain+ (ペイント)」は様々な活動を通じ、世の中にポジティブを作る団体です。

2011年3月11日に発生した東日本大震災、および福島第一原子力発電所の事故により、
私たちの国は未だ多くの問題と大きな不安を抱えています。

多種多様なクリエイターと協力し、様々な表現による情報伝達と意思疎通を計り、
時代が抱えている「pain(痛み)」に対して「+(プラス)」の要素を与えることで、未来を明るく彩っていきたいとの願いから、
私たちの活動を統括して「pain+ (ペイント)」と呼びます。

私たちは、様々なクリエイターと共に、作品を媒介としたコミュニケーションを図り、人と人とを繋げることを目指します。

「やりたい事に向き合う事で大きな力が生まれる事を証明する」ため、
一人でも多くのヒトをポジティブにするべく、私たちは活動を続けていきます。

1 INDEX

2-5 LOCAL VOICE

中山貴踏 [TAP DANCER]
INTERVIEW

6-8 SPECIAL INTERVIEW

鎌仲ひとみ [映像作家]
INTERVIEW

9-10 CATALOG

JAPS BY SAMO

Ishiki Magazine



SAMO

Same Old Shit Street Design

10-11 COLUMN

No Human No Cry

Ishiki Magazine



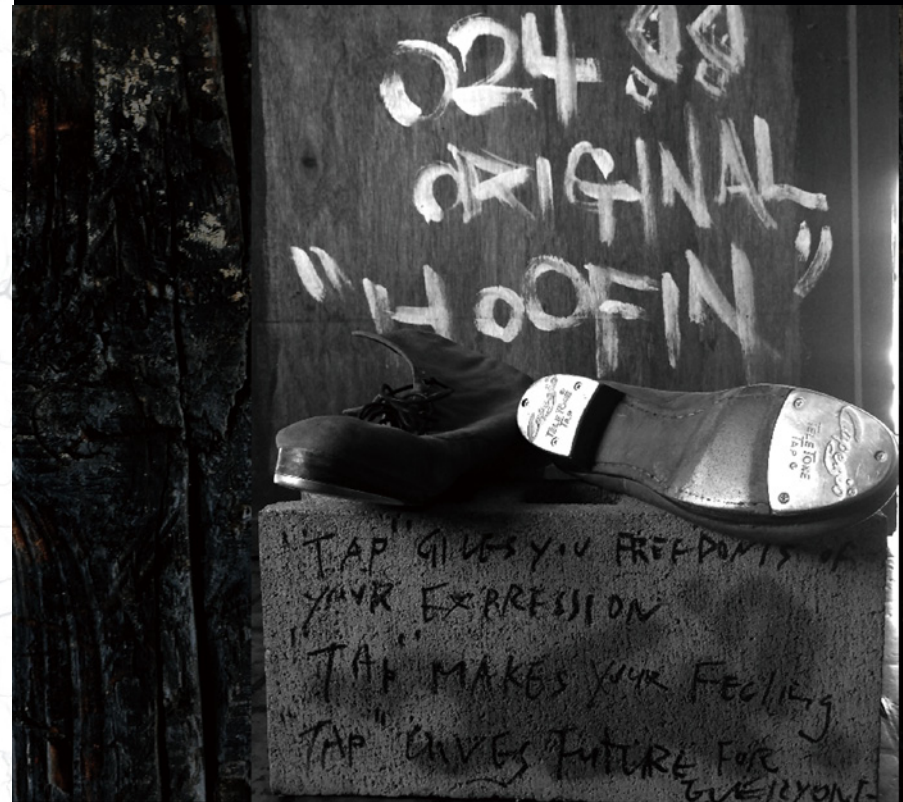
BOUND

Biwako Dance Fes

12 STAFF CREDIT

13 AFTERWORD

LOCAL VOICE



TAP DANCER

中山 貴踏

- RHYZM UNDERGROUND -

東日本大震災以降、
拠点を東京から地元の福島県郡山市へ。
TAP DANCEを通じて今、思うこと。

Q.1 震災がおきた頃 東京で活動されてた中山さんですが、当時何を感じ何を考えてましたか？

地震があったあの日は大宮にいました。街中に人が溢れ、パニック状態。駅ビルのガラスは割れ、水道管が破裂で、水が吹き出し、まともではなかった。駅のテレビでは津波が来た瞬間の映像。まったく意味がわからなかった。ひとまず田舎に連絡をと。とれない。

事の重大さは日に日に感じていきました。地元の原発の事

も含め。毎月二回はレッスンでかえってましたから、やはり東京での人の歩き方と、地元の人々の歩き方はどこか違うし、都会のスピードが僕は気持ち悪く感じて仕方なかったです。時差というか。

とにかくそこで僕は福島の人間なんだと強く思いました。



Q.2 東京から地元の郡山に戻り、活動するまでに至るキッカケなどはありましたか？

東京から福島へ戻ろうと決めたのは、震災から三年後でした。さっきも話しました"時差"が僕の中ですごかったし、情報だけが飛び交っていて、何が本当で何が地元の為になるのかを、"そこ"で生活をしなきゃわからないと思いました。自分の目で、肌で、みなければ、感じなければわからない。帰ろうとぎめたのは、単純に福島で生活をしなきゃいけないと思ったから。放射線の問題は正直、怖かったし、今でも怖いし、どこにいてもまともな情報など無いに等しく、所詮赤の他

人がごちゃごちゃ言うだけで、何が本当かもわからない僕達。福島人として地元をみる。TAP DANCERとして地元をみる。

そのために福島へ戻りました。

シンプルに。



Q.3 今現在郡山で活動をしながら福島や東北、今の日本に感じる事や思う事はありますか？

福島へ戻りはじめに感じた事は、なぜにこんなに無関心なんだ？と地元にはテナマークでしたね。爆発しちゃってんごよ！知ってる？って。浜通りの方達は家もなくなり、地元にも帰れない、家族や仲間、友達、愛する人達を失った方もいる。もちろん浜の方だけではなく。福島県全体の話。だけどね、お金が人の感覚を鈍らせるんだよ。あいつらは、結構もらってる。保証されてる。家を買えるくらいだ！なんだかんだ。うるせーよ！って。賠償金の話だよ。金の話よね。至るところに設置されている放射線量をはかる機械。結構数値高いよね。子供大丈夫？なぜ？なぜ？本当にわからなかったし、イライラしてた時期もあった。なにも解決していない。僕はそう思ってる。

福島県があつ震災前に戻る事があるならば、そうしてほしい。東北の被災地すべて。給食だって聞けばなしによれば、県内産を使って子供に食べさせるでしょ。まず、大人がおかしいよね。笑 福島県も、おかしきよね。日本は大丈夫？食の安全もかなり重要だと思う。山形の農家の仲間がよく話してくれる。こいつち〜ファームという農園を立ち上げてる仲間だよ。こいつもダンサーで、昔からよく踊った仲間。何を信じて生きていくか。自分しかない訳。自分を信じてこそ世界だから。仲良しこよしも、他人をどーこう言うのもやめよーまっつ。この国をかえたい！なんてさらさら思わないし、福島をかえたい！とも、さらさらおもわない。

自分が生活している場所が福島だから、どうにもならないことだらけだけど、ここで産まれたものとして、一步一步を確実に歩いていだけ。期待もないし、夢もない。あるのは目的。もつのは希望。外からみたらおかしきだろうけど、福島でどうせ生きていくのなら、自分を信じて進むべき。そして、なにより自分の心の支えになるものを。毎日呑み歩き、仲間と笑いあえばいい。TAPして踊りあえばいい。それが外部からみておかしきと思うかもしれないけれど、福島で生きていくって僕からしたら、ここでTAPを踏んで行くことなんだ。

「中山 貴踏」

1982/1/12 福島県出身。中目黒を拠点とするKAZ TAP COMPANY "TAPPERS RIOT"として都内を中心に全国劇場公演、ライブ、ワークショップと活動を経て、地元福島へ2013に帰省。"RHYZM UNDERGROUND"〜新世界〜名義で、"福島の言葉"として個人での活動を開始。福島県内、県外での公演、ライブ、ワークショップで活動中。〜RHYZM UNDERGROUND〜"新世界"
<http://shinekai.ffifactory.com/>



ここじゃ言い切れないほどフェイクなやつらも、売名行為じゃねーのか？とか思うことが山ほどある。金か？それともただ名をうりたいのか？きんざんあつた復興音楽イベントはどこにいったんだよ。震災後に必要だったのは、やすい上つ面な音楽なんかじゃない。

と思う。

命を守るための動きだ。もうわかるよね。誰かの為にある社会のシステムは、誰かが苦しみ、誰かが笑う。所詮他人事なんだと強く思う。震災後の音楽やらなんやらは、子供達にとって、福島にとって一時的にはよかつたと思う。笑顔になれるから。でも、その笑顔が続く福島の環境がなければ、快楽を与えただけになり、ヤクをくらつたようなもんだ。一時的な快楽を与え、復興での予算をそこで、つかっているとしたら、全く、おかしな話。(笑)

平和。平和って、戦争しないことかい？限りある地球の資源をみなで分かち合い、誰1人苦しみで涙を流さない世なんじゃないかな。僕はTAP DANCER。水面下で繋がる仲間はひのめを浴びることは少ないけれど、確実に愛をもって活動している。テレビ、ネットがすべてじゃない。僕はTAP DANCER。本気で遊んでいるよ。

TAPを踏むきっかけは命をうしなつたことからはじまり、僕自身、生きるか死ぬかの幼少時の病を乗り越え、今がある。せつかく自分に宿つた魂、限りある時間を誰かにコントロールされたくないし、精一杯生きるんだ。

福島の方々も、日本の方々も単純に生きるということにもつと敏感になつていかなきゃいけないんじゃないかなと、僕は勝手に思つてる。



小さき声のカノン

— 選択する人々 —

最新作公開決定記念

鎌仲ひとみ監督インタビュー

- 核をテーマとした映画制作をはじめた理由 ●
- 新作映画『小さき声のカノン』に込めた想い ●
- まずは知る、話し合う、そして行動する ●

● 原発の、その先へ ●



六ヶ所村ラブソディー

核をテーマとした映画制作をはじめた理由

ずっと私の作品の撮影を担当してくれていた友人の子どもが白血病と診断され、同じ頃にイラクで白血病の子どもが異常に増えていると報告を聞きました。しかも薬がなく治療もできない、と。本当かどうか？確かめたい。イラクの子どもたちのことが知りたい。私はその一心で1998年イラクに行きました。

そこで劣化ウラン弾という放射能兵器の影響を受けたと思われる子どもたちが、白血病やがんで苦しんでいる状況を目の当たりに。被ばくが私たち人間にとって重大な問題だと気付かされました。次々と亡くなっていく子どもたちの中で、ひとりの少女ラシャと仲良くなれました。彼女が亡くなる間際「どうか私のことを忘れないで」と、小さなメモに書いた私宛てのメッセージをくれて。私は彼女との約束を今も大切にしています。劣化ウラン弾が原子力産業の出すゴミから作られることを知って、これ以上子どもたちに被ばくさせないために何が出来るのか考え、核をテーマに映画を作ってきました。



内部被ばくを生き抜く

まずは知る、話し合う、そして行動する

多くの人には、放射能の脅威を具体的に感じるのが苦手なのかもしれません。原発被害の中身を完全に知らず、色んな情報がメディアによって迫害され、犠牲が見えていない。被ばくの本質は遺伝子に傷をつけることです。内部被ばくをした人々は、時間をかけて健康を損なわれても被ばくのせいだと認めてもらえずにいます。姿も見えない、認めてもらえない、声も聞いてもらえないような被ばく者がいる。その人たちの声は誰かが拾わないと出てこないのです。これから日本は変わらなくてはいけない。「ああそうなんだ」「かわいそうだな」だけでおしまいでは困るのです。

まずは数人でも、一生友人でいたいと思えるような大切な人に愛をもって伝えること。どのような未来が可能なのか？私たちは何を選択したらいいのか、一緒に考えてみんなで話し合ってもらいたいです。答えはひとつではないし、やり方は多様だと思います。何でもいいから何かする。無力だと思わないで、微力でもいいから、みんなで少しずつ変えていく。それを日本中でやれば、大きな変化につながるはずです。

新作映画「小さき声のカノン」に込めた想い

このままでは子どもを守れない、と行動を起こしたのがお母さんたちでした。今まで、政府のやり方に対して疑問を感じたり、声をあげたりしたことがなかったお母さんたちが、避難したり保養に出かけたり、食品を測定したり、政治を変えようと立候補したり。カノンでは震災後の福島だけでなく、東北、首都圏、そして避難先と、沢山のお母さんたちの声に耳を傾けています。28年前にチェルノブイリ原発事故を経験したベラルーシのお母さんたちも登場します。国も違うし民族も違うけれど、時間差で私たちと同じ「放射能汚染されてしまった世界」を生きてきた人たちです。ベラルーシのお母さんたちがどのように子どもたちを守り、どう生き抜いてきたのか。その生き様は3・11後の世界を生きる私たちにとって、大きなヒントになるはずです。子どもたちの命や健康のことをあきらめる訳にはいかないのです。絶対にゆずれない。ここであきらめては、命をつないでいくことができなくなる。自分にとって本当に大切なことは何か、幸せとはなにか、ということをもう一度思い出すキッカケにしたいだけのような映画に仕上げたいと思っています。

原発の、その先へ

立ち返るべき生命の論理。

それは人間の命だけではありません。

人間の命を支えているのは、ありとあらゆる生態系の中にあるもの。

小さな虫とか、魚とか、鳥とか、そういうものが存在して初めて、私たちも存在できている。

その生態系のかけがえのなさ、重要性に気づききっかけに、今回の原発事故はなかったのではないのでしょうか。

人間だけが人工的な都市を築いてそこで繁栄していくという事は、持続不可能である以前に実現すらも不可能なのですから。

※「原発の、その先へ ミツバチ革命が始まる」より抜粋



鎌仲ひとみ

映像作家

早稲田大学卒業後ドキュメンタリー制作の現場へ。
90年初作品「スエチャおじさん」監督、文化庁助成を受けカナダ国立映画制作所へ。

93年からNYにてメディア・アクティビスト活動。
95年帰国、フリー映像作家としてテレビ番組、映画を監督。

2003年ドキュメンタリー映画「ヒバクシャ―世界の終わりに」以降、2006年「六ヶ所村ラブソディー」、2010年「ミツバチの羽音と地球の回転」核を巡る三部作完成。

2012年DVD「内部被ばくを生き抜く」発売。
2014年現在、新作「小さき声のカノン」選択する人々」撮影中。

オフィシャルサイト www.kamanaka.com



pain+ × JAPS BY SAMO

クリエイティブオフィス「SAMO」が展開するプライベートライン「JAPS」と「pain+」のコラボレーションTシャツを販売します。Tシャツの売上は制作費を除き、全額「pain+」の活動資金となります。

価格 4,000 円 問い合わせ先 / contact@samo.jp



morning flavor

Change the values.
Sun to grow the plant and peace.

低価格で粗悪な「モノ」が、仕掛けられた情報やネームバリューによって売られていく現代社会において、永らく愛着の対象となる様な、上質で個性を引き立たせる「モノづくり」を追求し、ブラックカルチャーと呼ばれる文化が培ってきた歴史と美意識を感じさせるアイテムを展開します。

かの天才芸術家「ジャン＝ミシェル・バスキア」がスラムの壁面に残したグラフィティの様に、身につけた人々がストリートに溶け込みつつも、目を引く様なアートピースになってほしい。

そんな願いから、ブランド名である「Same Old Shit」は、バスキアがグラフィティをかき始めた頃の名義「SAMO -Same Old Shit-」に由来しています。



the dark "hinomaru"

The dark "hinomaru" can't cover.
It's fall off with time and it have bad influence to around.



the history of "American Stars"

America has many stars. It's their glorious history.
Where to go?

No Human No Cry

Ishiki Magazine



BOUND
Biwako Dance Fes



淡い珊瑚色を帯びて美しく広がる空が、深い青に包まれていく。

主を失った家屋に明かりが灯ることはなく、紺青の闇に溶けていく。

悲哀を含んだ美しい景色は、その地を襲った脅威を静かに物語っていた。

ここは宮城県亶理郡山元町。

東日本大震災とそれに伴う大津波により、沿岸地区6部落が壊滅し、多数の犠牲者を出した場所である。



びわ湖ダンスフェスBOUNDでは震災直後から「おてら災害ボランティアセンター テラセン」を通じ、この地と関わり支援を行っている。2011年には復興作業用の軽トラックを送り、翌年はガイガーカウンターを3台、その次の年からは義援金を送っている。そういった関係を続けていく中で、今年は地元で開催される山元町町民文化祭にBOUNDクルーとしてダンスで参加する機会をいただいた。

山元町町民文化祭の当日、本番を迎える前に、テラセンセンター長の藤本和敏さんと普門寺のご住職にお話を伺うことができた。お二人が語る日々の活動から、被害の大きさと復興の難しさを再認識した。沿岸部から若者は消え、人の集う機会が少なくなっているらしい。今後の展望についての話をした際に、お二人が涙ながらに語った「未来のことは僕らもわからない、でも今は人々が笑顔で集まれる場所を作る」という言葉に心から感銘を受け、少しでもお力添えが出来る様に、これからも支援を続けていくことを強く心に誓った。

そして文化祭本番、僕らを待っていたのは割れんばかりの拍手と歓声だった。会場を埋め尽くす来場者は、ほとんどがご高齢の方にも関わらず皆さんが笑顔で声援を送ってくれた。これまで様々な被災地を周り、踊る機会をいただけてきたけれど、複雑な問題を抱え傷付いた被災地に対し、踊ることで何ができるのか。いつもその答えを探し、常に迷い、悩みながら現場にたってきた。しかし、この日の歓声はそんな僕らの悩みを簡単に吹き飛ばしてしまう程、暖かく気持ちのこもった「声」だった。「続けてきてよかった。少しずつでも自分ができることをこれからも続けていこう」そう素直に思えた。

支援という言葉を使うことを躊躇するほど、本当に多くのことを教えられ、与えられる。

「この町に出会えて良かった。」心からそう思う。

BOUND 実行委員会

おてら災害ボランティアセンター テラセン <http://ameblo.jp/teracen/>

びわ湖ダンスフェスBOUND <http://bounders.jp.net/>



BOUND
BIWAKO DANCE FEST

ASHIOTO



PLANNING
pain+

久保 群青
DIRECTOR/EDITOR

伊藤 聡浩
DIRECTOR/DESIGNER/EDITOR

小谷野 健太
DESIGNER

小野 カロリーナ
DESIGNER

yumico michikusa
EDITOR

Shinya Yokoyama
PHOTOGRAPHER

印刷協力
躡心

SUPPORT MEMBER

上村大輔
中川真吾
小島朱里
林準一
大音和弘
坂東邦明

取材協力 / 写真提供

中山貴踏
Honna Naoki
鎌仲ひとみ
和田佳代子
藤本和敏
普門寺ご住職

THANKS

田中浩司
沼尾英俊
居川信彦
岩根卓弘
中嶋孝明
西村豊弘
藤田寿正
山口富祐樹
横田亨
脇坂直樹
久保賢志
大和
二瓶由美子
二瓶野枝
浦上雄次
IKKEN
AKKIN
田中光太郎
NOBU

Koh Yoshida
内野洋平
七島奈緒
安立風太
安井英貴
富安和陽
渡辺メイ
木澤智
DJ JAVA
Deejay Tetsu
柳谷翔
荒川太一
内藤隼
伊澤寛之
鈴木達朗
吉崎礼央
吉崎小夜子
浅井映博
川浦素詳

宮本貴史
1364
牧一心
長尾晃久
サブロウ
山下恭平
伊藤豊浩
佐々木繁太
田浦幸司
松本悠
林道雄
原田久敏
ハラダヤスヒロ
丹下和太留
篠田宗典
澤田崇史
真野幸太郎
宮崎晃太郎
SAM

Ono Maiko
Hideyuki Johnny
BBOY PIRANIA
BBOY ZURI
Atsushi Nachi Ito
kaeru
BLANKA
shinge2
BOUND 実行委員会
福田屋
足音 crew
430crew
XEKE Co.,Ltd.
Angle R DancePalace
Rei Dance Collection
PLEASURE GARAGE DANCE WORKS
Live & Lounge vio
NPO 法人オンザロード福島事務局
家族、友人、出会った全ての人々

あの日を境に意識が変わった

目を疑うような景色に生きる人々
未だ拭いきれない不安

悲しみや怒りを越えた感情

なにげない「当たり前」は奇跡の塊だったとようやく気付く

時が流れ
世の中が平静を装っても決して戻れない

それでも
揺るぎなく穏やかに自然の営みは続き
日はまた昇り繰り返す

この素晴らしい自然を守りたい
自然の中で走り回った少年時代
僕らが幼い頃の日常を次の世代にもつなげたい

積み上げられた問題に自分たちが出来ることはきっとある

毎日食べられること
かけがえのない家族や友人
生き方を選び向き合えること
日々の大切さを知り
意識は高まる

僕らにはやり直せるチャンスが残されている
まだ目指すべき光はある

一人一人が東北に意識を向け
少しでも関わりを持つ事できっと何かが変わる

未来は明るいと信じたい

このマガジンが皆さんの意識に触れ、進むべき未来への道しるべになる事を願って